

部門別スケジュールと論点（検討課題）**期間と日程**

- □ 最終目標：国際研究集会の開催による論点整理と政策提言
 - □ 各部門のワークショップでは、ある程度、ペーパーとして提出できるまで議論を深めておき、その成果を踏まえて、総合的に討論する機会を作る。以下のそれぞれの部門で一日発表と討議を行い、4日目に総合的な討議をする。
 - □ 国際研究集会での議論を踏まえ、各部門で提出されている原稿を加筆・修正し、研究成果をまとめる。
- □ 第3部門：遠隔教育における国の規制や関与の実態
 - □ 1. アンテナを広げる
 - □ 2. 分析対象を絞り込む
 - □ 3. ワークショップを開催する
 - □ 論点は、通信法、放送法による規制もあるが、特に、大学評価との関係での国家の役割が問題。サイバー大学などのように完全にインターネット授業で進めていく場合に、学生のクレームなどをどのように把握していくか。授業および大学の評価システムとの関連において、国はどのような役割を担うべきか。
- □ 第2部門：遠隔教育における大学内での管理及び教育指導体制
 - □ 1. アンテナを広げる
 - □ 2. 分析対象を絞り込む
 - □ 3. ワークショップを開催する
 - □ 第3部門の論点との関係において、学習効果が高まるようなe-Learningは具体的にどのようなものか。その場合、（1）インターネットのみの遠隔教育、（2）通信とスクーリングが組み合わせられた、日本では一般的な通信教育、そしてさらに（3）フィジカルな教育基盤の上で、遠隔教育が組み合わせられたものの種別化の上で、遠隔教育の在り方を検討する必要がある。さらにそのような区別を念頭に置いた上で、教育支援の基本的な役割は何かを明確にする。また、各専門分野によって、遠隔教育のあり方や意義は異なってくる。たとえば、MBAなどのトレーニング型教育に置いては、遠隔教育は効果を発揮する可能性は高いし、また逆に、日常的な経験の少ない現代の大学生の教育においては、実地教育が重要であり、遠隔教育は必ずしも必要ではないと判断されるかもしれない。しかし、それは必ずしも正しくはない。というのもあらゆる実地調査をこなすことは不可能であり、一定の限られた時空間でもより多様な実体験的な経験を遠隔教育が可能にする場合も考えられる。
- □ 第1部門：遠隔教育における情報通信及び学習技術
 - □ 1. アンテナを広げる
 - □ 2. 分析対象を絞り込む
 - □ 3. ワークショップを開催する
 - □ 論点として考えられるのは、加速度的な通信技術の発展の中で、用途に合わせて有効な通信技術の選択は如何にして可能なものか。また今後のさらなる技術的な発展の可能性を踏まえて、どのような投資が効果的なものか。また、現時点ではどのような機種やソフトを使用することが、大学の理念や目的において、有益な効果を生むことになるか、その点を評価できるような仕組みは何か。また、医療や化学実験などの情報発信においては、より鮮明な画像が要求され、技術的な問題も多く含まれているため、今後の技術革新との関連も調査する必要がある。

2009年11月（4日間）

2010年3月まで

2007年12月から2008年3月

2008年3月から6月

2009年2月

2007年12月から2008年1月

2008年2月から3月まで

2008年11月

2007年12月から2008年1月

2008年7月